現代の日本の学力の低下

～受動的に勉強する日本の学生～

高校１年　Ｆ　組　１６　番　名前　小林　想史

指導教論氏名　田口　哲夫　先生

目　　次

Ⅰ　はじめに

Ⅱ　現代の日本における学力の低下

Ⅲ　なぜこのような事態になったのか

（1）指定校推薦制度の必要性

（2）勉強環境の変化

Ⅳ　世界との教育の違い

Ⅴ　この先の日本の未来

現代の日本の学力の低下

～受動的に勉強する日本の学生～

高校１年Ｆ組 16 番　小林　想史

Ⅰ　はじめに

この論文は、現代の日本の学力の全体的な低下について私の考えを述べたものである。そして、この現状を変える方法を考察することを目的とし、まずは現代の日本の学力低下の根拠をまとめ（第Ⅱ章)、その原因を私の考えと共に述べる（第Ⅲ章)。次に世界との教育に対する意識の差異を指摘（第Ⅳ章）し、それらを踏まえて最後にこの状況を変える方法を考察する（第Ⅴ章)。

Ⅱ　現代の日本における学力の低下

QS World University Rankings、通称、世界大学ランキングの結果が今年も発表された。1 位はイギリスのオックスフォード大学､2 位はアメリカのスタンフォード大学で､3 位もアメリカのハーバード大学であった。そして気になる日本の大学の順位は、東大が昨年と同じく 36 位、京大が 54 位と昨年の 65 位から上がった（図 1)。ここで図 2 を見てもらいたい。この図は 2004 年から 2015 年にかけての世界大学ランキングでの日本の大学の順位の推移をまとめたものである。見ればわかる通り全体的に低下している。そう、日本の大学の学力は今世界的に見て低くなっているのだ。

また､文系学部を対象とした京都大学経済研究所教授の西村和雄氏と慶應義塾大学経済学部教授の戸瀬信之氏による 1998 年の数学学力調査によると、

1. 私大のトップ校の経済学部でも分数・小数などの算数レベルも危うい学生がいる。
2. 私立上位校でも数学未受験の学生の数学力は中学 2 年生程度である。
3. 国立大の最難関校の学生でも入試で数学を経験していない学生の多くは中学の数学もできない。

という結果が出た。ここからも日本の大学の学力低下が見受けられる。

さらにこれは大学に限った話ではない。文部科学省が平成 16 年に実施した小学生・中学生を対象とする勉強に対する意識調査では、「かなり心配している、多少心配している」が 76.1%、「どちらとも言えない」が 9.6%、「あまり心配していない、全く心配していない」が 11.6%だった。

THE 世界大学ランキング 2021

世界のベスト15		日本の上位大学 ※大学名の前に★があるのが私立大、○がないのが公立大、無印が国立大	
順位	大学名(国)	順位	大学名
1	オックスフォード大学(英国)	36	東京大学
2	スタンフォード大学(米国)	54	京都大学
3	ハーバード大学(米国)	201-250	東北大学
4	カリフォルニア工科大学(米国)	301-350	東京工業大学
5	マサチューセッツ工科大学(米国)	351-400	名古屋大学、★産業医科大学、大阪大学
6	ケンブリッジ大学(英国)	401-500	九州大学、東京医科歯科大学、筑波大学
7	カリフォルニア大学バークレー校(米国)	501-600	★藤田医科大学、北海道大学、★帝京大学
8	エール大学(米国)	601-800	○会津大学、★東京慈恵会医科大学、★関西医科大学、★慶應義塾大学、神戸大学、★日本医科大学、○横浜市立大学
9	プリンストン大学(米国)		
10	シカゴ大学(米国)		
11	インペリアル・カレッジ・ロンドン(英国)		
12	ジョンズ・ホプキンス大学(米国)		
13	ペンシルバニア大学(米国)		
14	スイス連邦工科大学チューリッヒ校(スイス)		
15	カリフォルニア大学ロサンゼルス校(米国)		

高校生新聞社（禁転載）

図 1 2021 年度 世界大学ランキング

https://www.koukouseishinbun.jp/articles/-/6768

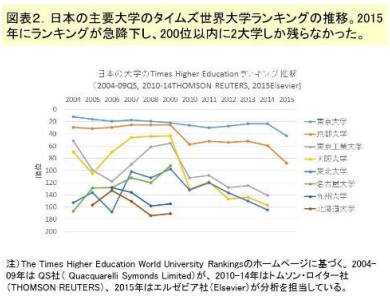

図 2 2004 年～2015 年の世界大学ランキングにおいての日本の大学の順位の推移

https://blog.goo.ne.jp/toyodang/e/c4db8101c950cb47ff5b9128114d3cec

しかし平成 15 年に実施した同様の調査の結果では、「かなり心配している、多少心配している」が 69.7%という結果だったため、1 年で 6.4%も勉強に対する不安が高まったと言える（図 3)。

これらのことから日本の学力は明らかに年々低下しているのはわかってもらえたと思う。ではなぜこのような事態が起きているのだろうか。私は人が勉強する理由や、勉強をする本人たちの環境に問題があるのではないかと思う。学力低下の原因を、その根本から探ることで、未来の日本の学力向上の方法を見つけられるだろう。

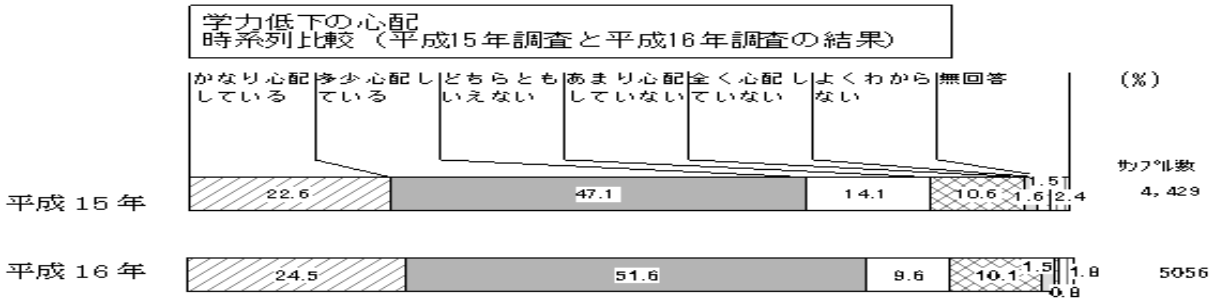

図 3 勉強に対しての意識調査の平成 15 年と平成 16 年の比較

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/attach/1377445.htm

Ⅲ　なぜこのような事態になったのか

(1) 指定校推薦制度の必要性

最初は大学入試のシステムの問題について述べたい。まず日本の大学の入試形態は大きく分けて、「一般入試」「推薦入試」「AO 入試」の 3 つが存在する。一般入試は最も馴染みのあるテストによる選抜形式で、推薦入試は指定校推薦・公募推薦の二種類がありテストを受ける必要のない形式、そして AO 入試は主に大学と直接面談をして合否を決める形式である。

ここで私は推薦入試、特に指定校推薦という制度に焦点を置きたい。指定校推薦制度について詳しく説明すると、大学側が指定した高校に対しその大学の推薦枠を与え、高校が進学を希望する生徒を選抜し、大学と面接をし合否を決めるという制度である。この制度は私立大学で主に用いられており、AO 入試と大きく違うところは指定校推薦での面接はほぼ確実に合格できるというところである。つまり極端に言ってしまえば学校である程度の成績をとっていれば、頭が悪い・勉強ができない人でも私立のトップ大学に入れてしまうわけである。

ここで私が言いたいのは、学校での定期テストの成績が良いだけで上位の大学に入れてしまうのはおかしいのでは？ということである。一般入試組の多くは複数科目を徹底的に勉強しているのに対し、指定校推薦組は定期テストのみの勉強ができる場合が多い。そのため定期テストはできても、模試などの長い範囲のテストなどでは成績を取れない人が指定校推薦組には多いのだ。結果、模試で A 判定の人が運悪く不合格、一方模試で E 判定の人が指定校推薦で勉強せずに合格、ということが起きてしまうのだ。さらに生徒の親がその学校の教師で、コネを使い推薦を取ったという事例もあるそうだ。

現代の日本が求めているのは、ある程度決められた範囲しか出ない試験で点数を取れる人ではなく、出るところが不確定な試験でもすぐに対応ができような応用力を持ち合わせている人である。それにも関わらず、日本トップの私立大学である早稲田大学・慶應義塾大学は 45%、MARCH は約 40%、関西学院大学なんて 70%の人が一般入試を受けないでその学校の生徒だと名乗っているのだ。日本の上位大学がこのような人たちで構

成されていては、どんどん日本の学力が低下していっているのも納得がいくだろう。さらに指定校推薦は学校側が自分たちの進学実績を少しでも多く見せたいという意図で使用される場合もあるため、ますます日本の教育姿勢は悪くなる一方である。

(2) 勉強環境の変化

次に勉強をする当人たちの周りの環境の変化について述べたいと思う。勉強は周りのためではなく自分にためにするものである、とよく言われているが、そもそも周りの環境が良い状態になければ勉強をするのは困難だと私は考える。そして、その環境についての詳しい理由は２つある。

第一に、家庭のしつけ力の低下である。戦後、都市化・核家族化が進み、家庭のしつけ力が確かに低下した。祖父母は家にいないし、両親も共働きで、子どもと接する時間は短い。せっかくの夕食もテレビが主役で、食事が終われば子どもはさっさと自分の部屋にこもってしまう。父親は毎晩仕事漬けで、夜１０時にならないと帰らない。そうした中で、子どものしつけができるだろうか。常識が育つだろうか。しつけがなっていないものだから、我慢することができない。そのため、学校の勉強を一生懸命しなければならないのにも関わらず怠けてしまい、学習の習慣が身に付かない。遊びにうち勝つ強い精神力がなくて、どうやって勉強できるのか。きちんとした生活習慣こそが学力を付ける第一歩である。それができていない結果として学力低下が引き起こされるのだ。

第二に、我々を誘惑する「遊び」が多すぎるという問題である。昔と違って我々には、ケータイ、テレビ、マンガ、ゲームなどの勉強より面白いものが大量にある。そのため、「難しくて」「苦しい」勉強に目を向けなくなるのは当然だ。こうしたことの背景には、子どもを金儲けの対象とする資本主義という制度自体のに問題がある。まだ判断力のない子どもをターゲットに商品開発をし、流行を作り出し、「みんな持っている」とせがまれれば親は買わざるを得ない。経済成長さえすれば何でもいいのか。金さえ儲かれば何をしても許されるのか。ケータイ、テレビ、マンガ、ゲームなどにうつつを抜かす者は、いわば資本主義的金儲けの犠牲者だと言える。もちろん、中には信念を持ってテレビを買わない親、ケータイを持たせない親もいないことはない。また、そうした誘惑にうち勝つ強い意志を持った者もいる。しかし、そのような生徒や親は社会全体としては少数である。多くの者は誘惑に負けてしまい、勉強に関心を示さなくなる。結果的に、日本社会は勉強をする少数の集団と、勉強をしない多数の集団に二極化するのだ。

Ⅳ　世界との教育の違いず

ここまで日本の教育について述べてきたが、世界大学ランキングで毎年上位を占めているイギリスやアメリカの教育はどのようなものなのだろうか。まず第一に挙げられる海外の教育の特徴は、個人個性教育を重視している点だ。まずアメリカの小学校では主に、子どもの表現力と主動性の育ちと発展を重視する。なにか子どもの間で問題が起きても当人同士だけで解決させたり、授業では自由に呟いたり歌ったりゲームもしている。さらに学校側は絶対に学生の前で成績を発表せず、多くのデメリットを持っている人間でも一つのメリットで先生に褒められるのだ。幼い子どもでも自分でできることは自分でやらせ、自分でしたいことも自分で選ばせ自分でやらせる。親はできるだけ手出し口出しせずに見守ることで、子どもの自主性・積極性を育てるのだ。中学では教師の啓発式教学や学生の個性表現を重視しており、学生に十分な発言と討論時間を与えて、個人の見解を出すのを励ます。同時に授業教学は概念と応用を重視して、丸暗記を要求しないのである。宿題もできるだけ学生を考えさせるようになっており、多くの学生が宿題を出来上げるためにわざわざ図書館まで資料を調べるのだ。

それに比べて日本の教育はどうだろうか。先生の授業をクラスの生徒全員で聞き、学期末のテストの結果で

成績を決める。授業は生徒がわからなくても勝手に進み、子ども一人一人の能力を伸ばすよりも集団で足並みを揃えることに重点を置かれている。常に生徒は受け身の姿勢で授業を受け、テストも暗記重視のためテストが終われば忘れてしまうことが多く、社会人になったときには学校で学習した事はほとんど覚えていない＝役に立たないという結果になってしまうのだ。日本がこのような教育をしている間に、海外では小学生のうちに全員の前で自分の意見をプレゼンテーションしたり、クラスメイトとディスカッションして自ら発信する力をつけ、自分という人物に自身を持っている。「不得意なこと」よりも「得意なこと」に注目されることで個人個人の得意な分野や眠っている才能を開花させたり伸ばしたりしている。ここから日本が海外よりも教育の点で大きく劣っているのがわかっただろう。実際 OECD という機関が 3 年に 1 回実施する国際的な学習到達度調査である PISA の日本の順位が年々低下していることが図 4 からわかるだろう。日本の学生は受動的に勉強しているのに対し、海外の学生は能動的に勉強しているのだ。

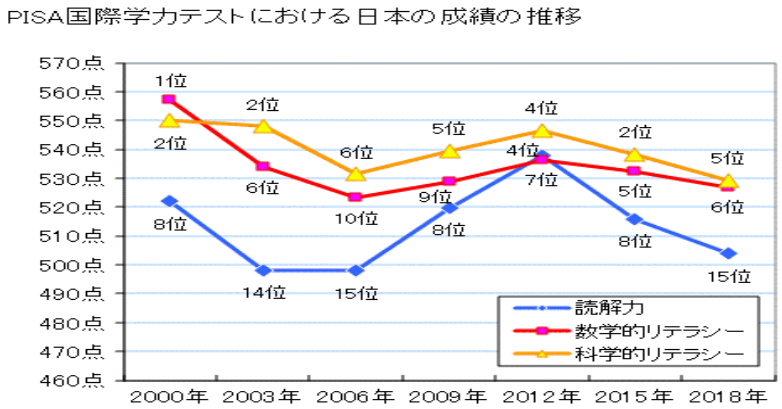

図 4　PISA 国際学力テストにおける日本の成績の推移

https://honkawa2.sakura.ne.jp/3940.html

Ⅴ　この先の日本の未来

これまでに述べたことから日本はこれからもっと海外と学力の差をつけられ、日本全体の学力も低下していくのは自明だろう。

私はこの現状を変えるためにまず、生徒と教師との信頼関係を築き上げるのが大事であると思う。

好きな教師だからその科目の勉強をするというのはよくあるが、嫌いな教師の科目であれば、相当その科目が好きでない限りは必死に勉強することはないだろう。つまり生徒と教師の間にある程度の信頼関係が築き上げられれば、生徒も能動的に授業を聞くようになり、その科目の勉強も自主的に進めるだろうということだ。第Ⅲ章の（1）で指定校推薦制度について述べたが、極論入試制度がどうであれ、ある学問に一定の興味を持ちそれを応用させ将来に役立てれば、社会の学問に対する意識は向上し、それに伴い日本全体の学力も上がると私は考える。

しかし当然、学校にいる子供は一人ではないので、全員の信頼を得るというのは至難の業だろう。おそらく、学力の低下を防ぐよりも難しいに違いない。けれども、教師が子供の信頼を得ることが出来れば、学習指導要領がどういったものであろうと学力の低下は起こらないであろう。そのため今後はより実行性のある案を考えていきたい。

【参考文献】

・　大野晋・上野健爾『学力があぶない』（岩波新書　2001 年）

・　西村和雄『学力低下と新指導要領』（岩波ブックレット　2001 年）